
饅えた匂いの鳥

林檎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

饅えた匂いの鳥

【Nコード】

N7373C

【作者名】

林檎

【あらすじ】

哀れな女にはなりたくない。そう、饅えた鳥の匂いが身体から漂うことを防ぐかのように、死人の如く眠りにつく私。

ただ息をするのを意識すらせずに、夜が来て死んだように眠る毎日なんて、今となつてはウンザリなの。

薬がまだあつたか考えて不安になる、この小さな心の動きがクセになるわ。

私寂しいから、少しでも氣に入れば付いて行くわ。

油断すらしようとしない。

楽しいおしゃべりの中から流れ込む必然の肉体関係。

曲がりなりにも電波光らせて当たり障りない会話茹だるほどしてきた仲だもの。

貴方最初からそうだったの。

何を勘違いしたのか、貴方言わなくても私をミテル。そういう女だつてね。

それを知つてて会つたの。

惹かれてるなんて貴方、間違えてもそんな風に思わないでね。

寂しさのせいにもしないと、なんて私はみじめな女なの。

ああ頭がほら、重くなってきた。

馬鹿な女に成り下がったつもりはないの。

周りが腹の底でどう思つていようと。

自制心保つには、簡単に壁のない女になつたつもりで、貴方とほんの一時の恋人気分。

だけど、ああなんて空しいの。

まさか。貴方の太い血管が動く音を愛しいなんて感じない。

してやつたつもりなら、貴方大きな間違いよ。

ゴミみたいな相手なんてそこら中にちらばつて、烏に啄まれてる。

貴方の心臓の中身なんて手に取るように分かる。

寂しい人間なのは、私達お互い様よ。

ぽっかり空いた穴を埋められるような女じゃなくて残念ね。ただど罪はお互いが被るものだから、責めようがない。

貴方にとって私は烏。

私にとつては貴方ゴミ。

そうでしょ？

割り切った付き合いができないならこれで終わり。

泉のように情が湧き出て来ないうちにね。

なんであたしはいつもこう。

別に純粋な聖母じゃあるまいし。

気を抜くとほら、ああ、寂しいじゃない。

なんだか体内がとても空虚だわ。

星の無い空を見上げて煙草を吹かしながら、意地でも涙だけは流すまいと皮肉に笑ってみせる。

泣くことは私の中で今、自分に対する最大限の侮辱。

ダサい。醜い。

泣くぐらいなら精神崩壊した方がずっとマシだわ。

ね、泣かなければクールな女になれるでしょう。

最初から何も期待してた訳じゃないし、何も変わらない日常崩されたこと、当たり前のように今ぼんやり眺めてるわ。

さあどうする？

貴方満足したでしょう。

男の感情なんて分かりたくもないけど、一瞬でも女と逃避できたんだから贅沢よ。

あたし、案外その辺の烏じゃないでしょ。

あの細い眼で品定めするように私を見てた。
どう見えた？

私は貴方が気に入ったわ。

喋る言葉と横顔。暗闇の中の熱い手のひら。

笑うとうざいぐらい明るい顔も。

知識ひけらかしたがる男臭いところも。

吸ってる煙草も皺になったTシャツも。

首も。

だけど全部上面なんだから、意味が無い。

あたしがそうしてるのと同じように、自分を見せてない。

見せる必要がない。

意味がない。

恋愛沙汰じゃあるまいし、みっともなく媚びるなんて反吐が出そうよ。

必要なのは貴方が男で私が女であると言うことだけ。

それ以外に何のオプションが必要だというの。

隣り合って横になり、最後までたどり着くのに僅かな切なささえ邪魔なのよ。

一瞬高まるあの温度が冷めてしまったら、ただの他人でしかないんだから。

だけど誰かの体温、私もうすぐまた必要になるの。

『寂しい、寂しい人間だから』

そうゆうさりげない言葉で取り繕って誰かの体温が。

ああ指先が震えてどんどん瞼が落ちてくる。

隣りには誰も居ないから、つい昨日の貴方の匂いを思い出す。

女からは出せない男の匂い。

唇はどう？

どうしてだか貴方は私を愛しそうに慈しんでみせた。
暗闇で貴方の心臓に穴をあけた誰かさんにも以前同じように？
可哀相なのはどっち？

貴方きつと私と同じ。

だから寂しい時にはきつとまた会いたくなるわ、私に。
私からは繋がらないからね。
みじめで餓えた匂いのする鳥にはなりたくないから。

ああ疲れきった私の心臓など、いつそ止まってしまえばいいのに。
食べなければ動けないなら、ヤニと酒にまみれた真つ黒な臓器すら
全て要らない。

さあ眠くなってきた。

瞼の隙間から見える数ミリの空間に、何のシルエットもないことで
チクリとする心臓。

辛いことすら考えられないぐらい、ああ薬が私を助け始めた。

携帯から鳴り響くけたたましい着信音に、この眠りを妨げられる
ことを密かに祈って、私はそう、死んだように眠る。

（後書き）

ごちゃごちゃした文章ですいません。最後まで読んで頂きありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7373c/>

饅えた匂いの烏

2010年10月11日16時55分発行